

## 全労済協会 中央大学法学部公開講座

### 「福祉と雇用のまちづくり

～誰もが働き暮らし続けることができるまちづくりへ～

第 14 回 2022 年 7 月 20 日

「『ひとりにしない』という支援 ー居住支援と伴走型支援ー」

認定 NPO 法人抱樸 理事長 奥田知志 氏

#### ■原木をそのまま抱きしめ、受け入れる

NPO 法人抱樸の理事長の奥田です。本業は牧師です。抱樸という名前は、中国の老子の「素を見し樸を抱き」という言葉から付けたもので、樸の字は人偏や手偏ではなく木偏です。これは原木や荒木を意味します。製材されたきれいな木ではなく、原木をそのまま抱きしめ受け入れるということは支援をする上でとても大切な考えだと思い、この名前をつけました。

福祉においては、障害者の手帳を持っているか、収入が非課税世帯以下か、年齢が 65 歳以上かなど、いろいろな条件に合った人が対象者であるとみなされます。最後のセーフティーネットである生活保護も、原則的には申請主義で、自分から申請をした場合に受け付けが行われます。しかし、福祉の現場で一番困っているのは相談に来ない人たち、来られない人たちです。ですから、こちらから行って出会おうということで、抱樸の活動は 1988 年、ホームレスの人を訪ねて回る支援から始めました。私たちの支援を受けて路上からアパートに住めるようになった人の数は 3,700 人を超え、2002 年にホームレス自立支援法ができた影響もあって、抱樸の 34 年の活動の中でホームレスの数は確実に減っています。もともと抱樸の活動は制度から始まったものではなく、一人の人と向き合って「この人には何が必要なのか」を考えてきた活動なので、現在の抱樸の事業はホームレス支援にとどまらず、子供・家族丸ごと支援、障害福祉・介護事業、更生支援、就労支援など 27 事業に及び、職員の数も 120 名と、地方の NPO としては大きなものになっています。

#### ■居住を失うとはどういうことか

居住を失うとは、何を意味するのか。まず、命に関わる「生存的危機」、あらゆる行政的手続きが困難になる「社会的危機」、「どこの馬の骨かわからない」という言い方に表されるように社会的な孤立が進む「関係的危機」という 3 つの危機に直面します。そこで居住の支援をどうするかが重要な訳ですが、一方では空き家が増えているという状況があります。国交省の発表によると、全国に 800 万戸の空き家があり、駅から 1 km 以内で耐震・耐火の基準もクリアしている空き家が 140 万戸あります。この空き家をどのように活用していくか。それと、家が確保できれば問題は解決するかというとそうではなく、プレーヤー、つまり居住支援の専門職の確保も必要になります。居住の支援について考えるときに、私たちはハウスレス（経済的困窮）とホームレス（社会的孤立）の 2 つの視点に重きを置いてきました。家がないと就労もうまくいきませんから、まずはハウスの問題です。それから、アパートに入ってハウスを確保した後に就職が決まったものの、自立が孤立に終わるといった例を支援活動の最初の頃にたくさん見てきました。これは、ハウスはあってもホームと呼べる、人と人との関係がないということです。ホームレスは一般的には宿がない、外で寝てい

る状態をさしますが、私はそうは思いません。ホームレスとは人との関係を失っている人たちで、ハウスレスとは違うという考えに至りました。居住支援というと住宅の問題と多くの人が考えますが、そうではありません。800万戸も空き家があるのに貸してもらえない、その根本には、その人が孤立している、お世話をしてもらえない、亡くなったときの残品の処理や葬儀をしてくれる人がいない、つまり家族に当たるような見守りや相談の引き受けをしてくれる人がいないという問題があります。居住支援とは、住宅をあてがうということではなく、家族が担っていた継続的で包括的な支援の体制を作ること、「ひとりにしない」ということが非常に重要だと考えています。

### ■「名前のある個人として、物語を生きる」領域まで伴走する支援

孤立と孤独は分けて考えるべきだと思います。孤独は仲間づきあいの欠如や喪失による好ましくない感情、つまり主観です。孤立は家族やコミュニティと接触がない客観的な状態です。そこで私たちは二つの困窮と二つの支援論を考えるようになりました。経済的困窮と社会的孤立、解決型支援と伴走型支援です。経済的困窮は、社会的孤立を生みます。いわゆる金の切れ目が縁の切れ目です。反対に、社会的孤立が経済的困窮を招くことがあります。他者の存在が生きる意欲や動機づけとなるのです。これらがスパイラルのように問題を引き起こします。作家の高橋源一郎さんと対談したときに「つながりや関係が無くなるのが問題」といったら、高橋さんは「つながりが無くなるということは“ことばを失う”ということですね」と仰いました。全くその通りで、ことばを失うということは、その人の物語が失われるということです。社会保障は現金給付、現物給付が中心です。自立支援は、自分の物語を創造するための条件整備です。ホームレスの食事となる残飯は、よく「エサ」といわれますが、食べ物に炊き出しの人の手が関わることで、物が物語になります。私たちが考える伴走型支援とは、物を物語に変える支援であり、人生支援です。解決型支援は、困窮状態から生活維持の最低基盤まで回復することをまずは最優先に支援しますが、伴走型支援はそこから先の名前のある個人として自分の物語を生きるという領域にまで関わり続ける支援です。

### ■失われた家族の機能を担う抱樸の活動

家族の風景が大きく変化しています。1980年に、最も多かったのは夫婦と子供の世帯で、次が祖父母を含む3世代が同居する世帯、第3位が一人暮らしでした。それから40年経った2020年にどうなっているかという、第1位が一人暮らし、第2位が夫婦と子供世帯、3世代同居は第5位でした。しかし、私たちの頭の中は昭和55年で止まっているんじゃないでしょうか。家族がいる前提でさまざまな仕組みや地域社会が出来ているため、現実と齟齬が生まれています。家族がいれば連帯保証人になったり身元引き受け人になるのは当たり前でも、家族がいない人はアパートに入居できないということになり始めています。これまでの日本型社会保障の基盤は、家族と企業がカバーしてきました。しかし、企業で働く人の4割が非正規雇用になり、家族も企業も脆弱になると、日本型社会保障の基盤と制度の間に隙間ができます。この隙間には新しい民間と新しい制度が必要です。抱樸では家族の機能をプロのスタッフがカバーする仕組みを作りました。それと共に地域の互助会を作り、家族の機能を担っています。もし興味があれば、抱樸について様々な情報を発信しているので、検索してみてください。

<文責：全労済協会調査研究部>